

冬期放牧の草地利用管理技術

農業研究センター 草地畜産研究所

担当者: 樋口俊二

研究のねらい

阿蘇地域には約 2 万ヘクタールの草資源があり、この草資源を利用して従来から、夏山冬里方式の放牧が行われ、省力かつ低コストで繁殖牛の経営が行われてきた。しかし、内外の情勢に対応した競争力のある肉用牛経営を確立するためには、一層の省力・低コスト化が必要である。

そこで、ASP(秋期備蓄草地)による放牧期間延長技術を活用した冬期放牧草地および野草地の牧養力について明らかにし、放牧の周年化を図る。

研究の成果

- 1 8月下旬より牧草の備蓄を始めたASP草地の収量が1.5t/10a以上あれば、冬期放牧期間中(12月から3月までの約4カ月間)の1頭当たり草地面積は0.5haで十分である。
- 2 ASP草地に適する草種は、トールフェスクやオーチャードグラスが厳寒でも比較的、緑度を維持しており、それらの優占草地は利用率が75%以上と高い。
- 3 それに対し、レッドトップやリードカナリーグラスは草の枯込みが著しく、それらの優占草地では利用率は30%程度と極めて低い。
- 4 牧草成分の経時的変化についてみると、TDN、CPとも減少する傾向を示し、無機成分についても徐々に低下する傾向にあった。
- 5 ススキ優占野草地の冬期放牧試験では、体重の減少率は12~15%あったが、栄養度指数や血液成分値からみて放牧開始時に痩せすぎ(栄養度指数3以下)の牛以外は健康収態にあまり問題はない。

野草地に冬期放牧(12月から3月までの約4カ月間)を実施する場合は、1頭当たり2ha程度が必要である。

普及上の留意点

- 1 ASP草地の備蓄開始時期は採草地では2番草収穫後、放牧地では8月中旬の掃除刈後とし、施肥(N:P₂O₅:K₂O=5:10:5kg/10a)により備蓄草量を確保する。
- 2 2番草の刈取りは10cm程度の高刈りとするこで、3番草の再生を促し備蓄草量を十分に確保する。
- 3 トールフェスク、オーチャードグラス、ペレニアルライグラスが優占する草地を冬期放牧用採草地として利用し、レッドトップやリードカナリーグラスが優占する草地の3番草は、採草や秋期放牧草地として利用する等草種に応じた利用を行う。

表 1 備蓄草量と残存率(9年度成績)

牧区	面積	入牧時 風乾物量	退牧時 風乾物量	差引	残存率	優先草種
A	1.5ha	5.26t	1.29t	3.97t	24.5%	オーチャードグラス
B	4.5ha	24.21t	1.62t	22.59t	6.7%	トールフェスク
計	6.0ha	29.47t	2.91t	26.56t	9.9%	

表 2 備蓄牧草の成分(8年度成績)

(単位:乾物%)

牧区	採取日	CP	TDN	Ca	Mg	K	K/Ca+Mg
B	11/20	14.7	60.1	0.32	0.27	3.31	2.25
	2/11	12.6	57.1	0.19	0.19	1.79	1.81
	3/03	10.0	56.5	0.18	0.18	1.51	1.70

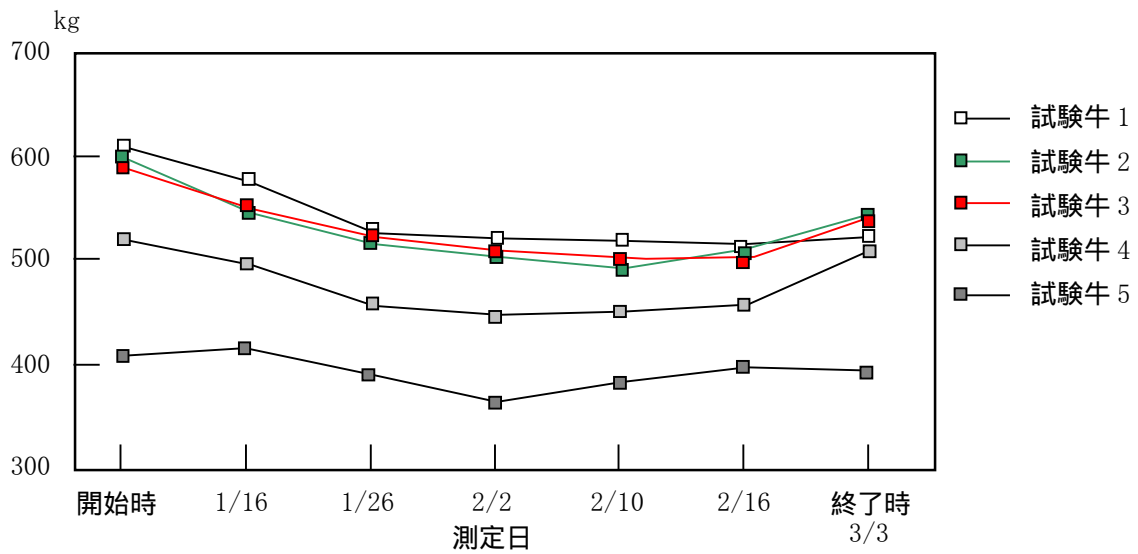


図 1 野草地放牧における体重の推移(9年度成績)

注)2/2より補助飼料としてロールペール給与開始